



# 博物館だより

横須賀市自然・人文博物館  
神奈川県横須賀市深田台95  
046-824-3688



<https://www.museum.yokosuka.kanagawa.jp>

もくじ	巻頭特集：企画展示「新着資料展2022～近年収蔵の近現代史料から～」	1
	漂着した武士の遺体	2
	ハゼ類の多様性	3
	しだ・こけテラリウム	4
	一足先に春をお届け	4
	冬の天神島臨海自然教育園	4

## 巻頭特集 企画展示「新着資料展2022～近年収蔵の近現代史料から～」

### 1 行事概要

#### ■企画展示

「新着資料展 2022 ～近年収蔵の近現代史料から～」

#### ■会期

令和4年3月5日(土)～6月19日(日)  
9時～17時(休館日を除く)

#### ■場所：横須賀市自然・人文博物館 特別展示室

### 2 展示の概要

新着資料を初披露する企画展示です。博物館には、多くの資料が大切に収蔵されています。しかし、これら貴重な資料も展示会のテーマに合わない限り実物展示の機会に恵まれることはありません。今回の企画展示では、資料の展示機会の拡大を主眼として、展示会全体のテーマを設定せず、多くの貴重な資料を幅広く紹介します。

### 3 主な展示資料

#### ◆米兵とその家族の似顔絵コレクション

～持ち帰られなかった横須賀・日本みやげ～

終戦後の横須賀では、アメリカ軍関係者向けのおみやげ屋さんが増えました。その中には、似顔絵を描いて販売する店も多く軒を連ねていました。当館では、アメリカに持ち帰られなかった似顔絵のコレクションを収蔵しており、これらを初めて一堂に展示します。

#### ◆横須賀市立の小中学校の昔の資料・写真・記録映像

2022年は、横須賀市立汐入小学校と豊島小学校の創立150周年目にあたります。これを記念して、この両校をはじめとする一部の市立小中学校の歴史資料や古写真などを展示します。

#### ◆美しい天井飾り～戦前の医院と横須賀鎮守府庁舎～

1926(大正15)年に完成した旧横須賀鎮守府庁舎は、

外観はモダンでありながらも内部は西洋の古典様式でデザインされており、当館ではその天井飾りを収蔵しています。当館ではさらに、同じく、西洋の古典様式でデザインされた昭和初期の医院建築の天井飾りを収蔵しています。この戦前の医院の天井とその廻りでは、特に、ギリシャ神殿に通ずる西洋の古典様式のデザイン要素が色濃く反映されています。

#### ◆戦前戦後の雑誌コレクション

『海と空』、『海軍グラフィック』、『海洋少年』、『アサヒグラフィック』などの古い雑誌を展示します。そのうち、横須賀関係の記事の一部は、見開きで紹介します。さらに、汐入小学校150周年を記念して、同校出身で東京帝国大学総長を務めた平賀譲の記事も展示します。

◆その他、勲章・従軍記章コレクション、旧市立病院などの横須賀の古写真や旧軍関連資料の一部などを展示しています。

(近代建築史担当 菊地)



展示風景

## 編集後記

今号で紹介した「新着資料展2022～近年収蔵の近現代史料から」では、近年当館に対してご寄贈いただいた様々な史料を展示しています。横須賀市ゆかりの貴重な史料を展示を通してじっくりご覧ください。(藤井)



## 漂着した武士の遺体

本号では、新政府軍と旧幕府軍の戦いである戊辰戦争（1868-1869）が終結した頃、三浦半島に漂着したとある遺体をめぐる出来事について紹介します。

明治2年（1869）5月20日、鴨居村（現横須賀市鴨居）の百姓佐七（57歳）が藻草（もぐさ）を刈るため村内の観音崎浜を通りがかったところ、岩陰に武士の身なりをした溺死体（「侍体（てい）之（の）溺死骸」）を発見しました。村役人立会のもと当日のうちに遺体の検使（検視）が行われ、翌21日には、発見者である佐七と鴨居村の村役人によって浦賀役所（旧浦賀奉行所、当時は神奈川県の出張所）へと遺体の漂着が知らされることとなります。その際、佐七らから浦賀役所へ提出された文書には、漂着した遺体の状態や着衣、所持品の詳細が記されています。こうした記録によると、流れ着いた遺体は「波二柔（揉）揚られ数日相立候義二も可有之、観音崎浜岩陰二肉脱髑髏（どくろ）二而（て）手足も散乱侵（浸）晒相成居候」と数日間波に晒（さら）されていたことで大変無惨な有様となっていました。また、衣類は絹で仕立てられた胴服と袴、「白襦袢」（和服用の下着）、「霜降博多帯」（霜降り柄の博多帯）、腰に西洋風の「胴乱」（薬・印・銭・煙草などを入れて腰に下げる革製の袋）を結び付けていたそうです。そして、その「胴乱」のなかには金29両余の大金と印鑑・眼鏡・ピン・磁石がそれぞれ1つずつ、着ていた服の袂（たもと）にあった「西洋巾着」にも金銭が入っていたようです。さらに、漂着した遺体の側には「越前国住包則」と銘の入った刀1腰が落ちていたとあります。こうした報告を受けた浦賀役所では、事件の可能性は低いと判断し、鴨居村の寺院へ仮に埋葬すること（「仮埋」）を指示し、所持金は鴨居村に預け置かれました。そして、「年齢・格好・死体之様子」を記した建札を往還端に設置し、6ヶ月の間、尋ね来るものがなかった場合には改めて鴨居村から浦賀役所へ願い出るよう仰せ渡しをします。なお、明治2年（1869）5月段階では未だ武士身分は解体しておらず、遺体の様子について「侍体之溺死骸」と役所へ報告するなど、外見や所持品を見れば当該人物の身分（あるいは出身階層）が一目瞭然であったことが窺えます（他にも、町人の身なりであれば「町人体溺死骸」とある）。

さて、一度は浦賀役所の指示で埋葬された遺体ですが、発見から9日後の5月29日、遺体の引取を求める者が現れ、彼らによって遺体の身元が明らかとなります。引取人として現れたのは福井藩（越前松平家）藩士で御目付役の田嶋又三郎とその部下でしょうか林東という二人の武士でした。福井藩といえば、徳川家

康の次男・結城秀康を藩祖とする「御家門」（徳川将軍家の親族）の大名であり、幕末には明君として名高い藩主松平慶永（春嶽）を輩出した名門です。なんと鴨居村に漂着した遺体は福井藩32万石の重臣（家老）で、酒井孫四郎（1839-1869／享年31歳【数え歳】）という上級階層の武士であることが判明しました。酒井孫四郎は、藩命により欧米修学のため横浜を出発した直後、明治2年（1869）5月8日に観音崎沖で暗礁に触れた船が沈没し、命を落としたのでした。酒井孫四郎が海難事故に遭遇した観音崎沖（浦賀水道）は、潮流も早く、また三浦半島と房総半島の間が最も狭まる海域であったことなどから、海難事故が多発する危険海域とされています。酒井孫四郎の遺体が鴨居村に流れ着いた、明治2年（1869）5月頃には、鴨居村のほかにも上宮田村（現三浦市）で町人風の身なりをした男性2名、久里浜沖での沈没事故により金田村（現三浦市）へ外国人2名の遺体が海岸に漂着するなど、海沿いの村々へ遺体の漂着が相次いでいます。海からは漁業や海運を通じて多くの恵みをもたらされる一方で、海難事故により多くの人命が失われました。

その後、福井藩家老酒井孫四郎と身元が判明した遺体は「引取方として同人（※酒井孫四郎）家来兩人国元より参り引取方万事取計居申候」と、自身の家来によって鴨居村から国元である福井へ引き取られたそうです。酒井孫四郎は、元治・慶応の長州征伐、戊辰戦争にも一軍の将として出征し、「強勇の名」を馳せた武士でしたが、その最期はあまりにも早く、また悲劇的なものでした。なお、酒井孫四郎は、その死から40年後の明治42年（1909）9月に、明治政府より生前の功績が認められ、「従四位」の贈位を受けています（田尻佐編『贈位諸賢伝 一』（国友社、1927年））。

（文献史学担当 藤井）



現在の浦賀水道（房総半島から対岸に三浦半島を望む）



## ハゼ類の多様性

昨年（令和3年）5月に、上皇陛下が2種のハゼ類の新種記載論文を発表され、話題になりました。「ハゼ」は、ハゼ釣りや磯遊びでもよく見かける身近な魚ですが、その全体像はまだ明らかになっていない研究途上のグループです。

一般に「ハゼ」とか「ハゼ類」と呼ばれる魚は、硬骨魚綱スズキ目ハゼ亜目（海外では「ハゼ目」としてスズキ目から独立させている場合もあります）に分類される魚の総称で、まだ名前が確定していないものも含めると、世界でおよそ2200種、日本国内でもおよそ660種、三浦半島からおよそ80種が見つかります。この種類の多さや、熱帯から寒帯まで、あるいは河川・湖沼から深海まで生息する、広い環境適応性と種の分化が研究を難しくかつおもしろくしているのです。

その中で最も親しまれているのが、秋に川の河口域でハゼ釣りの対象となるマハゼでしょう。その昔、東京湾岸では1日で100匹以上釣れて当たり前の庶民的な魚でしたが、産卵に適した浅い泥底の海や稚魚の成育に適した干潟などが埋め立てられたことにより次第に数が減ってしまい、現在では体長20cm級の大物は高級魚として扱われるようになりました。もうひとつ、磯遊びで子どもに人気なのがアゴハゼです。潮だまりをおもな住処（すみか）として一年を通して三浦半島の磯で見ることができ、タモ網で簡単に捕まえられる魚として子どもたちの絶好の遊び相手になっています。

当博物館の収蔵資料の中には、三浦半島だけでなく世界中から集められた研究材料として貴重なハゼ類の標本がたくさんあります。上皇陛下が皇太子時代に新種として発表されたクロオビハゼの模式標本（種類の基準になる標本）や、学芸員が新種として発表したヒメアオギハゼ、エリホシベニハゼなどの模式標本、外部の研究者が新種として発表された10種を超える模式標本など、博物館の資料はハゼ類の研究に貢献してきました。昨年11月には鹿児島大学との共同研究によって、奄美大島で採集されたハゼ類の収蔵標本が、それまでニューギニア島でしか見つかっていなかった種類であることが明らかになり、北半球からの初記録として論文が発表されました。その他にもまだ、名前のついていない種類のハゼ類標本が収蔵されていて、今後の研究が期待されています。

（海洋生物学担当 萩原）



クロオビハゼの完模式標本



北半球初記録のホコサキキラハゼ



ハゼ釣りの対象マハゼ



学芸員が新種記載したヒメアオギハゼ

## しだ・こけテラリウム

## 本館&馬堀自然教育園



2022年2月6日と13日に、博物館本館で「つくって学ぶ!しだ・こけテラリウム」を開催しました。会場は本館ですが、教材には馬堀自然教育園で採集したシダ(シダ類)やコケ(蘚苔類)も用意しました。2017年と2018年に教育園で実施した調査では、シダ類12科28種、蘚類9科14種、苔類9科10種が記録されています。参加者のみなさまには、博物館のまわり(人家のまわり)に生育する種類と、教育園のような山林に生育する種類を比較、観察しながらテラリウムを作成していただきました。(植物学担当 山本)



馬堀自然教育園内のシダとコケ  
(リョウメンシダの幼個体と  
ホウオウゴケのなかま)



参加者が作成したテラリウム

## 一足先に春をお届け

## 天神島臨海自然教育園



暖かくなってきた天神島臨海自然教育園ですが、今年最初に開花した花は、薄紫色の花びらがかわいらしいハマダイコンでした。今年は1月4日の開園日にはすでに咲いており、例年よりだいぶ早い開花となりました。ハマダイコンは日本全国の砂浜に生える植物で、その葉や茎、根は食べられますが普通の大根と違い、根は細くて短く味は辛いです。天神島のいたるところに生えていて、ハマヒルガオやハマエンドウなど共に春の天神島を彩ります。(天神島臨海自然教育園 小長谷)



教育園南口に咲いたハマダイコン



ハマダイコンの根

## 冬の天神島臨海自然教育園

教育園では、冬になると春から夏にかけてたくさん観察できていた、ウミウシなどの海洋生物の観察が難しくなっていますが、昆虫や野鳥などは冬でも観察することができます。中でも、オオキンカメムシは、冬に天神島で越冬をするため、葉の裏側などに集団でじっとしている姿を観察できます。今年も教育園南口付近でたくさんのオオキンカメムシを観察することができました。

(天神島臨海自然教育園 小長谷)



葉の裏で越冬するオオキンカメムシ

### メールマガジン配信中! メルマガに登録しよう!!

展示やイベント、読み物「学芸員 自然と歴史のたより」などを配信しています。

◎ 登録は簡単! 博物館 HP で E-mail アドレスを入力!

① 右のQRコードを読み込み、博物館ホームページ内の「メールマガジン登録・変更・解除ページへ」をクリック!

② 「登録・解除フォーム」に E-mail アドレスを入力して「登録」ボタンを押す!

URL ⇒ <https://www.museum.yokosuka.kanagawa.jp/mailmagazine>



### Twitter & Instagram

博物館の活動やお知らせについて発信しています!

ycm\_yokosuka 検索